

2021年8月21日

TIF第23回研究会
新しい日本人・日系人社会
～セブを中心にして

拓殖大学国際学部
新田目夏実

naratame@ner.takushoku-u.ac.jp

はじめに

- フィリピンの日本人・日系人コミュニティは、それぞれ固有の歴史的・政治経済的背景の中で時間をおいて成立し、さらに発展しつつある。
- このような状況は、移民理論的にみて興味深い事例を提供(移民過程、移民社会の連続性、補充移民の有無・理由)
- その実態については断片的に伝えられるのみで、全体的特長が明らかになったとは言えない状況
- 本稿では、フィリピンの日本人・日系人社会の歴史的変遷をたどるとともに、特に近年顕著になりつつある「新しい日本人社会」の実態とその理論的意義について検討する。



その他の地域

はじめに

- フィリピンの日本人・日系人コミュニティは、それぞれ固有の歴史的・政治経済的背景の中で時間をおいて成立し、さらに発展しつつある。
- このような状況は、移民理論的にみて興味深い事例を提供(移民過程、移民社会の連続性、補充移民の有無・理由)
- その実態については断片的に伝えられるのみで、全体的特長が明らかになったとは言えない状況
- 本稿では、フィリピンの日本人・日系人社会の歴史的変遷をたどるとともに、特に近年顕著になりつつある「新しい日本人社会」の実態とその理論的意義について検討する。

アウトライン

1. 国際移民の中のフィリピン
2. 戦前の「日本人」社会
3. 戦後の「日本人」社会－国交正常化と経済交流
4. 戦後の「日本人」社会－日本人会と日系人会
5. 新しい「日本人」社会－2010年～
6. 新しい「日本人」社会－英語留
7. 新しい「日本人」社会－「若者」の経験の類型化
8. フィリピン型ライフスタイル移民

1. 国際移民の中のフィリピン

- 16世紀以来日本との交流は古く、かつて「南洋」最大の日本人の町が存在
- 明治維新以降、フィリピン移民は、戦前、中国、南米とは違い、自主的・非契約移民が多い。
- フィリピンは「南方」方面移民の人気の移住地
- ルソン島北部山岳地帯バギオに至る「ベンゲット道路」建設のための労働移民が大規模移民の始まり。その後、マニラ、バギオ、ダバオに日本人街が発展
- バギオーアメリカ人のために作られた「夏の避暑地」

2. 戦前の「日本人」社会

- アメリカにとって緊急の要請であったベンゲット移民を例外として、契約移民(労働移民)は少ない。
 - ✓ アメリカはフィリピンの植民地であり、労働移民に対する反感が強かったため。
 - ✓ 1924アメリカ移民法(Immigration Act of 1924)、別名「排日移民法」の制定
- バギオは建設労働が中心
- ダバオはマニラ麻の生産で繁栄
- マニラは外交官、商社、銀行等を頂点にした社会階層が形成
- 「混血児」の増加、日本人子弟の教育問題の発生
- 日本の占領・敗戦に伴い、在留者の収容と強制送還、日本人社会の断絶
- 日本人二世に対する厳しい反日感情－日比関係が「正常化」する1970年代以降まで、アイデンティティを隠した生活

阿利莫二著

ルソン戦—死の谷



フィリピン関係文献目録
—戦前・戦中、「戦記もの」—

早瀬晋三編

早瀬晋三

フィリピン
近現代史のなかの
日本人

植民地社会の形成と移民・商品

ダバオ国の
フィリピン日系棄民



フィリピン日系の人の長い

ハボ

大野俊著

第三巻

早瀬晋三著

ベンゲット

虚像と実

近代日本・
東南アジア
関係史の
一考察

歩いて来た道

—フィリピン物語—

金

戦争と日系二世の苦難の歴史

- 1941年12月8日の開戦とともに戦禍の渦に
- 日本人、そして日系二世は徴用、あるいは積極的に戦争に協力、戦局が悪化する中で多くの犠牲
- 戦後強制収容、資産没収。生きのびた日本人は戦犯容疑者以外は強制送還。
- 日本人の父とフィリピン人の母の間に生まれた子は、年齢や個別の事情に応じて残留。
- 日系二世は、厳しい反日感情のなかに取り残され四半世紀近くを過ごすことに。
- 1995年の外務省残留二世調査ーフィリピン全土で2,125人(内377人は既に死亡)。ほとんどは母親がフィリピン人の子ども。終戦時の年齢は、1,089人(51%)が15歳以下

3. 戦後の「日本人」社会—国交正常化と経済交流

- 1956年日比賠償協定により国交回復
- しかし、真の「国交正常化」は日比友好通商航海条約(1960)の批准(1973)以降
- その後渡航者、在留者の増加
- 日本企業の進出

4. 戦後の「日本人」社会－日本人会と日系人会

- 1970以降に各地で日本人会の再結成
- 日本人会の重要な役割が「日本人学校」の運営、ただし二世の受け皿にならず。
- 1970以降に日系人会の組織化、文化的アイデンティティに加え、経済的メリットを意識

日本人会ーマニラ

- 1957年日本人会(「日本人会倶楽部」)が首都マニラで再結成ー強い反日感情のため、また、日比賠償協定が結ばれたのが1956年だったため。証券取引委員会への登記は1967年。1976年にマニラ日本人会と改称
- 会員数は当初数十名、2017年1月現在約2,600世帯、家族会員を含めると3,000名以上。
- 重要な役割の一つがマニラ日本人学校の運営管理
- マニラ日本人学校は1968年に日本語補習学級として開設され、1975年に大使館付属マニラ日本人学校として認可、フィリピンで最大の日本人学校。児童生徒数460名(2020年3月→現在200人弱)
- 二世の子どもの受け皿が1968年までなかった
- 戦没者慰霊祭
- <http://www.manila-shimbun.com/category/society/news258937.html>
- 日本人コミュニティーリスト
- https://primer.ph/guide/culture/nihonjin_communitylist/

日本人会ーセブ、バギオ

- セブ日本人会が設立1982年 <https://www.ja-cebu.com/>
- 当初約30名、2014年現在会員約240人、セブ日本人補習授業校(1983年開設)の運営責任、日本人墓地管理
- セブ観音戦没者慰霊
 - <https://www.facebook.com/JapaneseAssociationCebuInc/posts/2315443451919386>
- 北ルソン日本人会(バギオ)設立2007年
- 毎年戦没者慰霊祭
- バギオ戦没者慰霊祭 <https://janl.exblog.jp/240844246/>

日系人会～日本からの働きかけ

- 1973年バギオの日系人会(「北ルソン比日友好協会」)
- シスター海野の働きかけが大きい。1987年に「財団法人北ルソン比日基金」(理事長寺岡カルロス)を設立、日系の若者に奨学金を支援。
- 1983年フィリピン側からは外務大臣、建設・観光大臣が、日本側からは日本大使が参加し、「ベンゲット移民80周年記念式典」開催。ようやくにして残留日系二世の存在は公的に認知。
- 1986年日比親善友好会館アボン開設

日系人会～ダバオ

- タバオからの引揚者である吉田美明(ダバオ市ワガン日本国民学校校長)の働きかけもあり、1969年にダバオで「二世会」が結成。その後、二世、三世が1980年「タバオ日系人会」を、さらに、その後「フィリピン日系人会」に名称変更。
- 日系人会館の建設(1989年)
- 2020年現在ダバオ各地に13の支部が設立
- フィリピン日系人会国際学校(Philippine Nikkei Jin Kai International School)とミンダナオ国際大学(Mindanao Kokusai Daigaku)を運営

日系人会～その他

- 1973年にはイロイロに「日本人孤児会」が発足した。
- 1980年にはセブ日系人会が、1980年代にはいり、コタバト、ネグロス、サンボアンガなどの各地で日系人会の再組織化がスタート。
- 全国で15の日系人会が存在(フィリピン日系人リーガルサポートセンター)。
- フィリピン日系人連合会(1992年設立)
- 組織化のモチベーションが入管法の改正(1990)－「日系人」に対して「定住者」資格付与。
- 「日系人」というカテゴリーは、単に文化的アイデンティティの問題ではなく、経済的メリットを伴う具体的プラス要因となった。

5. 新しい「日本人」社会ー2010年～

- LCCの発展・オンライン予約の一般化に伴い、旅の個人化、容易化、リピーター・長期在留者の増加
- 渡航目的の多様化
 - ✓ 日系企業駐在者、ただし減少傾向
 - ✓ 観光、英語留学の増加
 - ✓ インターン・NGO/ボランティア活動参加
 - ✓ 起業の場としてのフィリピン
 - ✓ ロングステイ
 - ✓ 国際結婚

6. 新しい「日本人」社会－英語留学

- フィリピン英語の産業化－フィリピン渡航のプル要因
- グローバル人材育成の社会的要請－プッシュ要因
- 英語留学を通じて異文化交流、現地体験
- 1990年代より国際貢献への関心の増加、NGO活動の活発化
- スタディツアーの場としてのフィリピン、ボランティア活動の「メッカ」に。

日本人留学生数の推移

- 留学生数
 - 2010年 4,000人
 - 2011年 10,000人
 - 2012年 20,000人
 - 2013年 26,000人
 - 2014年 30,000人
 - 2015年 35,000人
- 内セブ島(フィリピン政府観光省発表・日本人留学生数の推移)
 - 2014年 5,901人
 - 2015年 6,506人
 - 2016年 7,792人
- QQ English－2019年の日本人の在籍者数は3,152人。在籍期間はひと月(1～4週間)が2,668人(85%)、二月(5～8週間)が267人(8.5%)、三か月(9～12週間)が140(4.4%)人と98%が3か月以内

フィリピン英語留学ーPull(引っ張り)要因

- 英語が公用語、英語による学校教育
- 世界第四位の公用語人口(米国、インド、パキスタン、フィリピン)
- フィリピン人の英語力に対する評価の変化・上昇、コールセンターはインドからフィリピンへ
- 韓国型英語留学ー学校内に寮を併設、キュービクル(個室)の中のマンツーマンのスパルタ授業
 - 英語学校数 TESDA(Technical Education and Skills Development authority) 認証500校
 - 外国人向けESL(English as Second Language)は、120~180、半数はセブ島に集中
 - 1990年代末な韓国系資本の参入、2010年以降日系資本の参入
- 法人英語研修から個人、学校へ
- オンライン英会話の普及▲

Pull要因－現地体験の増加とリピーター化

- 校外での飲食・ショッピングや週末の「アクティビティ」参加を通じて、(少しではあるが)本当のフィリピン社会を体験
- 辛抱強くかつフレンドリーなフィリピン人教員によるマンツーマン授業－学生と年齢が近く、また小柄、身体的圧迫感が少なく、友達のように感じられる先生とのパーソナルな「異文化交流」を通じ、フィリピン人とフィリピン文化を体験
- フィリピンが好きになったものは、語学学校のリピーターになったり、語学学校やNGO団体が募集するインターン応募
- 現地でボーイフレンド、ガールフレンドを作り結婚するものも

フィリピンの小学校



フィリピンの小学校の授業風景－板書は英語で



フィリピン・セブ島の英語学校 – 個室でマンツーマン授業



2013.8 撮影



2019.8 摄影

海外の職場でインターンする学生も



2018.9 撮影

フィリピン英語留学ーPush(押し出し)要因

- 経済界の圧力ーグローバル人材育成圧力
- 2002年「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」(文部科学省)
- 2012年「グローバル人材育成戦略」(グローバル人材育成推進会議)
- 2013年には「日本産業再興プラン-JAPAN IS BACK-」(日本経済再生本部)で「実践的英語教育の強化」の強調、2020年までに日本人留学生を6万人(2010年)から12万人へ倍増目標
- 2013年から「トビタテ！留学JAPAN」
- 大学入試改革として、4技能を重視する英語教育
- 2014年「スーパーグローバル大学」(文科省)の選定における留学・英語による授業の強化
- 海外短期研修・スタディツアーを重視する大学の増加

海外研修参加者の増加

- 海外旅行者は1964年に13万人、1986年に500万人、1990年に1000万人突破
- 1990以降、東西冷戦の終結、イラク戦争、カンボジア内戦終結、湾岸戦争
- 国際貢献への関心、国際NGOの増加
 - アジア太平洋資料センター、日本ネグロスキャンペーン、ピースボート
- 2000年以降、大学における海外研修の増加—アクティブラーニング、グローバル人材育成が目的

フィリピンにおけるNGO活動/災害支援活動への関心の増加

- 1991年ピナトウボ火山噴火—6万人が避難、150万人が被災者
- 2013年の台風ヨランダ—フィリピン最大級の台風、4メートルの高潮、1600万人が被災、死者6300人、40もの日本の民間団体が被災者支援
- 現地社会への貢献意識の高い若者

NGO活動・ボランティア活動、スタ ディツアー



2017.9 撮影

7. 新しい「日本人」社会—「若者」 の経験の類型化

近年のフィリピン移民は、ライフスタイル移民
ただし、移動要因や移動過程を見ると、「フィリピンの」特長あり
事例研究—5類型

パターン1: 英語学校立ち上げ・スタッフ型

パターン2: 英語学校留学—現地企業就職型

パターン3: 現地起業型(英語学校以外)

パターン4: 現地国際企業就職型

パターン5: ボランティア型

新しい日本人社会ーフィリピン型ライフスタイル移民

- ライフスタイル移民ー「自分探し」の旅に出る若者(加藤2009)や、アーティスト志望でニューヨークやロンドンに行く「文化移民」(藤田2008)、あるいは、よりよい「生活の質」をもとめてオーストラリアに移住するもの(長友2013)
- フィリピン「渡航者」は、豊かな時代における自己実現のための選択的移動、全体的にみるとこれらライフスタイル移民者と類似の傾向、ただし強い「フィリピンの特長」がみられる。

「フィリピン的」特徴

- 移動要因(push-pull)
 - フィリピン英語の産業化
 - グローバル人材育成
 - 大学生－学業の一部としての語学留学と強く結びつきながら、徐々に移動性が増加、リピーター化
- パーソナリティ要因(BigFive性格特性－協調性、誠実性、外向性、神経症傾向、開放性)
 - 起業者－強い戦略性、上昇意欲、使命感のようなものが感じられる(これはフィリピン渡航者だけではないかもしれない)。
- 移動過程－閉じたエスニック・コミュニティに体现されるようなソーシャルキャピタル(社会関係資本)が形成されているわけではないが、
 - 日本側、フィリピン側に、フィリピン留学ならではの緩い人的ネットワークや情報ネットワークの目に見える蓄積・制度化
 - 情報の送受信－「社会的送金」(social remittance)

「若者」の経験の類型化

- パターン₁: 英語学校立ち上げ・スタッフ型
- パターン₂: 英語学校留学—現地企業就職型
- パターン₃: 現地起業型(英語学校以外)
- パターン₄: 現地国際企業就職型
- パターン₅: ボランティア型 Daredemo Hero代表 内山順子氏

パターン1: 英語学校立ち上げ・スタッフ型

1) QQ English CEO 藤岡頼光氏

- 高校卒業後、日本でバイク便の会社を経営、既に経営者としての豊富な経験をふまえフィリピンで語学学校を設立。
- バイクの輸入販売の際に英語の重要性に気づき2005年フィリピンに留学。韓国系英語学校(CPILS)で学び、その経験をふまえて日系の英語学校であるQQ Englishを2009年に設立。日系英会話学校大手であり老舗である。
- セブ日本人会の副会長でもあり、新しい日本人社会と古い日本人会を結ぶ橋ともいえる存在。海外で起業している起業家のネットワークWAOJEセブ支部の元支部長であり、セブの若手起業家のまとめ役。
- 「英語でもっとみんなの人生を変えたい。やったことのない新しいことを、徹底的なこだわりをもってやりたい。内向きの日本を変えたい」という強い使命感と企業家意識を持つカリスマ的存在。

2) 英語学校Nexseed代表 高原大輔氏

- 大学卒業後、採用、マーケティング、事業再生、事業開発、キャリア支援事業を経験。人事部では年間1000名を超える新卒採用の陣頭指揮を執る。
- 「死ぬ前にこの目で世界中をみてみたい」という衝動を抑えきれず、世界40カ国を周遊。
- 国際社会での英語の必要性和ITスキルの重要性を実感し、2013年に、プログラミングスキル、英語力、異文化適応力を持ち、世界で活躍できる人材を育てるために、「人生が変わる場所」NexSeedを設立。
- カリキュラムの中に、英会話とともに現地体験を積極的に取り入れ、同時にITを教えている。

- 3) 会社立ち上げスタッフ
- Nは大学卒業アメリカのデザイン会社でインターン。必死で英語コミュニケーションを学んだ。その後2013年以來Nexseedの立ち上げに参加。三年弱マネージャーとして、カリキュラム開発とフィリピン人社員の人事管理を行うかたわら、週末はNPOセブンスピリットのボランティアとして、フィリピンの子どもたちに社交ダンスを教授。退職後帰国しAmazon Japanに就職。
- TはNと高校、大学の同級生。NexSeedで半年間のインターン経験の後、半年間アジアを放浪、その後Nexseedに就職。バックオフィス全般の財務、人事、法務、労務などに加えて、高原代表のアシスタントとして勤務。退職後帰国し株式会社リクルートに就職。

パターン3: 現地起業型(英語学校以外)

1) セブ島総合情報誌セブポット創業者 佐藤ひろこ氏

- セブ島の情報スペシャリスト。子どもの時から「外の世界に出よう、自分らしく生きたい、そのために知識や経験を積みたい」という思いがあり、大学在学中に世界30カ国を旅行。一年間マルタ島留学。
- 卒業後人材派遣会社に就職し猛烈に働いたのち、「もう好きなことをしたい」という思いと「島が好きだったから」セブ島に渡り、スパのマネージャーとして3年間勤務。
- その後2007年に情報誌セブポットを創刊。現在、不動産・ビジネスソリューションを手掛ける The Hatena Solutions, Incと Cou.A Holding, Inc3社の代表。日系企業の進出や海外移住・親子移住のサポートにも業務拡大。
- 「頑張りすぎずほどほどに。自分らしく、生きる。女性を楽しむ」がモットー。二児の母。
- https://www.cebupot.com/columns/visa_business/months-ceo-vol1/
- <http://www.nadeshiko-voice.com/interview/hiroko-sato/>

- 2) 勝呂方紀氏 コワーキングスペース&シェアオフィス
The Company経営
- 大学卒業後13年間NTT DATA、リクルートにて営業・マネージャーとして勤務。
- その後2年間夫婦で60カ国を歴訪。世界一周中に得たいくつかの気づきをもとに2017年にセブ留学し、その後セブで起業。
- 「一緒になって考える場所を作りたい」という想いで、フリーランス、スタートアップ企業向けビジネススペースThe Companyを設立。一店舗目を2017年12月に、2店舗目を2019年2月にオープン。
- 「まだ誰も見たことのない世界を見たい」という知的好奇心が日々の原動力であり、「世界中のメンバーと新しい価値を生み出したい」が目標。利用者の9割がフィリピン人である点で、現地社会との接点を築きつつある。



The Company
勝呂方紀氏

2018.8撮影

- 3) 森田剛氏 GO GO CAFE 代表
- 2店舗のカフェ&バーオーナー。大学卒業後コンサルティング会社に入社、そこで、学習塾のフランチャイズ運営ノウハウの販売及びそのサポートを行う。
- 4年間勤めた後、ただのサラリーマン生活に不満を覚え、大学院のMBAコースに入学。そこで東南アジアの可能性を知り、東南アジアの国々を自分の足で見て回りフィリピンで起業する決意をしてフィリピン渡航。
- フィリピンは英語が通じて物価が安く、タイ、マレーシアなどのように、まだ日本食が溢れている状況ではないこと、さらにフィリピン人は揚げ物が大好きなことに注目して、2015年カツサンドの販売を開始。
- まず、セブ島の路上でカツサンドを販売するという、現地人でも大変なやり方で話題を集め起業。体力勝負のビジネス展開だったようにもみえるが、上述のように、事業展開をみると非常に戦略的。その後支援者をつのり、現在の飲食店経営を開始。



CE

2 Karaage Teishoku 280
Japanese rice, chicken, soup, Coleslaw, cabbage

4 Karaage Bowl 220
Japanese rice, chicken, Spring onion, mayonnaise
Set(Coleslaw + Soup) 260

6 Beef Bowl 220
Japanese rice, US beef, white onion,
Set(Coleslaw + Soup) 260

Popular

3 Sauce-Tonkatsu Bowl

chicken Bowl

Beef Bowl

AFE

HIREKATSU SAND

HIREKATSU SAND (ヒレカツサンド)

Hirekatsu, Original hirekatsu sauce, Qupie mayo, Karashi

- Single(2slices) 140
- Double(4slices) 270
- Triple(6slices) 400
- Family(8slices) 530

CEBU's BEST SANDWICH
It's good for gift too!

GO GO CAFE

GO GO CAFE

2018.8撮影

パターン4: 現地国際企業就職型

- 西出大介氏ーフィリピンにある外資系IT起業Framgia (現Sun*)のフィリピンランチマネージャー
- 大学・大学院生時代から「インターネットや情報化によって社会がどう変わるか」に関心を持つ。卒業後、文系ではあったが住宅販売会社ホームズにエンジニア職として就職、そこで2年半猛烈にIT技術を学ぶ。
- ある程度力がついたと思い、さらにIT系の技術に磨きをかけたいと思ったが、シリコンバレーでは埋もれてしまうと感じ、自分でデザインメイクができ、リスクも取れかつ楽しそうなアジアに注目。
- 「世界の課題を自分ごととして受け止め、国境を超えて課題解決をできる人材」が、あらゆる地域から同時多発的に増えていくことで、世界が少しでもより良い方向に自発的に動いていくよう、支援していきたいと思っています。」
- バイタリティーにあふれ、使命感と大きな視野で地元貢献意識を持っている。<https://www.facebook.com/daisukenishide1>

パターン5: ボランティア型

- Daredemo Hero代表 内山順子氏
- 福祉の仕事に関心があり高校生の時から福祉施設でボランティア。大学では精神保健福祉士資格取得。
- 卒業後ワーキングホリデー制度を用いカナダ、アメリカ、南米に一年半滞在。バンクーバーでは精神障害の現状を勉強。
- 帰国後都内精神科クリニックに勤務。その後世界一周。
- 帰国後東京都23区特別区職員として勤務。公務員としての仕事の制約に悩んでいた時に、東日本大震災が発生し震災ボランティアに参加。
- その後フィリピンのレイテ島の台風被害を聞き、フィリピンに渡航を決意、2013年からDAREDEMOHEROに参加。
- 貧困児童の支援活動にとどまらず、日本人会主催の盆踊り大会の企画や、新型コロナウイルスによるロックダウンの際には、在留日本人の帰国支援を行う。「いまが最高に楽しい」と語る。

8. フィリピン型ライフスタイル移民

- 強い使命感、「起業家マインド」ーフロンティアスピリットを持った起業家の卵のインキュベーター
- フットルースでトランスナショナルなライフスタイル
移動要因ー英語産業との強い結びつき
- 移動過程ー
- 緩い(開放的)人的ネットワークの成立
- 情報ネットワークの成立による「社会関係資本」の蓄積、移動コストの減少
- 移民の自己継続性・累積的因果関係(cumulative causation)の成立
- 課題ー新しいキャリアラインの形成か

起業家のパーソナリティ特長ー起業家 マインド

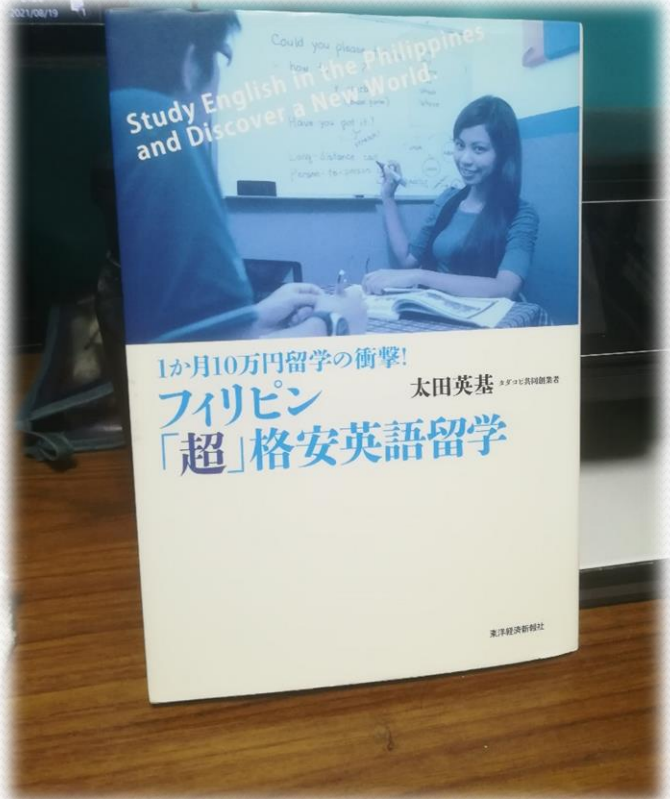
- 特に経営者になったケースについては、「起業家マインド」とバイタリティ
- 「ゆったりとながれる時間」や家族を大切にするといった「生活の質」
- 完成された先進国の大都市部との違い。フロンティアであるセブ島は、学歴にかかわらず、フロンティアスピリットを持った起業家の卵のインキュベーター
- ただし、近年高学歴化傾向もみられる。

フットルースでトランスナショナルなライフスタイル

- フットルースであり、トランスナショナルなライフスタイルー日本と絶縁したわけではない。現地に埋没したわけでもない。日本とフィリピンを自由に行き来しながら経済活動・社会生活を行っている。
- 事業形態を見ると、英語学校のように顧客が日本人の場合には言うまでもないが、NGO活動の場合も、日本人は重要な顧客(活動資金のスポンサー)
- このような事業の性格上、日本と縁を切ることはできない。

移民ネットワークの成立・制度化

- 大学による「フィリピン研修」やNGOによるスタディツアーは、参加した先輩から後輩への連鎖移民(chain migration)
- School Withーフィリピン留学を世に広めたパイオニアである太田英貴氏が2013に設立した留学・語学学校総合サイト<https://corp.schoolwith.me/whoweare>
- セブポットのような情報誌や佐藤氏がSNSや日本で行うセミナーー現地情報の紹介を通じて、新しい価値観や行動様式の選択肢(新しいライフスタイル)を日本向けに具体的な形で発信



太田英貴氏著書、2011年8月出版



移民コストの低下と自己継続的移民

- 移民先情報の蓄積と共有を通じて、移民に関心をもつ「コミュニティ」の間に「社会関係資本」の蓄積
- School withやセブポットのような情報サイトー情報の価格の低下、移住先と送出元を結ぶSNS時代における「社会的送金」(social remittance)
- The Companyのようなシェアオフィスー初期投資を抑制、移動コストの低減
- 「日本産業再興プラン-JAPAN IS BACK-」や「スーパードローム大学」は、そのような関係を国家的に制度化
- 移民の自己継続性・累積的因果関係(cumulative causation)の成立

旧来の日本人社会との関係

- 「新しい日本人社会の若者」たちの場合、日系人会はもちろんのこと、日本人会との関係は限定的
- IT系の若者はもともとグローバル志向が強いためか、セブ日本人会やその他ローカルな企業との関係は希薄
- 昔の在留者は日系企業駐在が多く、「休日はゴルフ、夜はカラオケバーに飲みに行く」
- 近年増加中の若者の関心の中心は、語学学習、観光、ビジネス、そしてボランティア活動

- ただし、若手起業家や結婚による定住者の現地化が進むにつれ、セブ日本人会との関係を再度深めていく可能性
- コロナ禍によるロックダウンの際に、セブ在住者(たくさんの語学留学生を含む)の緊急帰国のために、セブ日本人会が中心となりチャーター機を手配
- フィリピンに新しいライフスタイルを見出した日本人と、もはやルーツを隠す必要のないフィリピン人(日系三世、四世)が出会う場の広がり

まとめにかえて

- 2010年以降、英語留学、ボランティア活動等のための渡航や現地起業を目指す若者が増加
- フィリピンのライフスタイル移民－フィピンと日本に特有の「押し出し」と「引っ張り」要因により、フィピン移住へと方向づけられている。
- 起業家にみられる強い「起業家マインド」
- 英語留学・ボランティア活動－英語学習・ボランティア活動を促進する日本側の条件と、それを可能にするフィピン側の条件が存在。狭義の経済交流ではなく、「社会・文化的交流」という側面が強い

- 「新しい日本人社会」における移住者は、従来の「海外日本人社会」とは異なる「トランスナショナル」な側面－「日本人会」のような組織を通じて自らを組織化したわけではないので、集団というよりは、ある方向性を共有する緩い繋がり、ネットワーク的コミュニティ。

溶ける国境～課題

- 日本人社会・日系人社会の階層化・分断化 or 統合?
- 現地社会との関係－エスニック・エンクレイブ化?
- 在日フィリピン人の増加、故郷とのネットワークの維持
- 新しいキャリアか、袋小路か
 - 海外につながるキャリアライン－グローバル移動市場(インターン、就職、起業、日本に逆進出、放浪・長期滞在後帰国)
 - グローバル恋愛市場－国際結婚
 - 日本の「求職者」の輸出
 - エリート起業型－IT、クリエイター型
 - 落ちこぼれ就職型－コールセンター型
- 海外企業人ネットワークの萌芽
 - 世界の労働市場に向けて飛躍する日本人の若者
 - 現地に根付いたフットルースな国際人

参考資料

本報告は発表者の以下の論文をもとにしています。詳細は下記論文をご覧ください。

- 新田目夏実「フィリピンの日本人・日系人社会—歴史的変遷と今後の展望」、吉原直樹・橋本和孝・今野裕昭編著『グローバル化時代の海外日本人社会』御茶の水書房、2021年、第7章。

その他参考資料

- 加藤恵津子、2009、『「自分探し」の移民たち—カナダ・バンクーバー、さまよう日本の若者』、彩流社。
- 今野裕昭「ゆらぐ海外日本人ライフスタイル移民」『専修人間学論集』第10巻10号、1-13ページ、2020年3月。藤田結子、2008、『文化移民—越境する日本の若者とメディア』、新曜社。
- 長友淳2013『日本社会を「逃れる」—オーストラリアへのライフスタイル移住』、関西学院大学研究叢書。
- 長友淳2015「ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向:移住研究における理論的動向および日本人移民研究の文脈を通して」『国際学研究』4(1)、23-32頁。
- de Hass, Hein. 2010. "The Internal Dynamics of Migration Processes: A Theoretical Inquiry", *Journal of Ethnic and Migration Studies* 36(10), pp.1587-1617.

ご清聴ありがとうございました!

